

## ボランティア活動体験者における体験の活用について

笠原 芳 隆\*

本研究では、介護・介助活動を中心としたボランティア活動体験者の、当時の活動に対する意識や、現在の障害児教育等に対する関心、活動の自分自身の生活及び教職活動への活用について把握し、介護等体験学生が、体験を教職活動等に活用しようとする意欲を高めるための指導の在り方を明らかにすることを目的とした。

その結果、将来、介護等体験を通してより多くの者が障害児教育経験の希望をもち、体験の内容を教職活動に生かす意欲をもつことができるようにするために、障害児教育専攻の臨床実習等の様子を映像で見たり、実際に見学したりする機会を設けるなど、より具体的で継続的な事前・事後指導をカリキュラムに組み込むなどして実施する必要があることが示唆された。

キーワード：ボランティア活動 介護等体験 教職活動 大学カリキュラム

### I 問題と目的

小学校及び中学校の教諭の普通免許状を取得しようとする者に、障害者や高齢者に対する介護、介助、交流体験等（以下、介護等体験）が義務づけられて3年になる。

本法律の趣旨は、学校現場において、いじめをはじめとする心の問題がクローズアップされ、また、障害児と健常児の交流教育等が進められている現状に照らし、義務教育担当教師希望者に障害者や高齢者に対する介護、介助、交流体験等を義務づけ、人の心の痛みを理解できる人づくり、人間一人一人の能力や個性を認められる心をもった人づくりをめざすところにある。

本法律が施行されたことを受け、本学においても平成10年度学校教育学部入学者から、特殊教育諸学校2日間、特別養護老人ホーム等社会福祉施設で5日間の介護等体験を実施している。

特殊教育諸学校における体験について、本学学生を受け入れた学校の教員は、概ね学生の活動の様子を前向きに受け止め、積極的・意欲的に体験活動に取り組んだケースが多いと見ている反面、実際に利用者と接する中で戸惑っているケースがあるとも見ている（笠原・大野・安藤・河合, 1999）。また、体験によって学

生自身、障害児教育や福祉に対する関心、障害児教育就職希望の割合が高まっていることが明らかになっている一方で、精神的・時間的負担感やのちに行う社会福祉施設における体験に対する不安感が高まっているという結果も出ている（安藤, 1999）。

社会福祉施設における体験について、実際に学生を受け入れた施設の職員は、学生の様子を特殊教育諸学校同様、概ね前向きに取り組んでいたと受け止めたケースが多いが、やはり学生の中には消極的、義務的に活動に取り組んでいるケースがあるとも見ている（笠原・大野, 2000）。学生自身、体験そのものに満足感を持ち、他者との関わり方について学ぶことができたといった意見や、障害者や高齢者に対する理解が深まり、子どもたちに福祉について話すなど、体験を将来の教職活動に生かせるという意見をもつ者が多い。しかし、少人数ではあるものの、通常の教育に携わることを考えれば高齢者や障害児・者への介護等体験は生かせないと考えている者もいる。極端なケースでは、排泄等の介助活動に著しく嫌悪感を持ち、二度と介助・介護活動に関わりたくないと考えている者も存在する（笠原, 2000）。

介護等体験を実施するに当たっては、高齢者や障害児・者の特性、福祉制度、介護・介助の方法等を理解するための事前指導や、自分が体験したことを振り返り、何を得たのかを考える事後指導が必要だが、その

\* 上越教育大学障害児教育講座

時間が十分に確保されていないケースが多い(小川, 2000)。本学においても、事前指導と事後指導を合わせて150分程度しか設定されておらず、事後指導については、自分の体験を振り返る時間がほとんど含まれていない状況にある(笠原ら, 1999)。このように、高齢者や障害児・者、福祉に関する理解を深めることなく実際に手探りの状態で介護・介助活動をせざるを得ない状況下にあっても、多くの学生が本体験を前向きにとらえ、将来の教職活動に生かすことが可能だと判断していた。しかし、一方で体験を生かすことに否定的な者も見受けられた。

介護等体験は、義務教育教員免許状を取得するために、希望しなくても行わざるを得ないもので、介護・介助活動等に関心を持ち、自らの意志で行う、いわゆるボランティア活動とは異なる。このことは、介護・介助活動に対する意識や障害児教育に対する関心、将来の教職活動への活用に影響を与えると考えられる。

このことから、自らの意志でボランティアサークルに所属し、介護・介助活動等を行った者の、活動等に対する意識や、教職活動等への活用について明らかにし、介護等体験学生と比較することは、介護等体験を将来に生かすための実施の在り方について示唆を得ることになる。

そこで本研究では、本学学部在学当時、介護・介助活動を中心としたボランティア活動に携わった卒業生の、当時の活動に対する意識や、現在の障害児教育等に対する関心、活動の自分自身の生活及び教職活動への活用について把握し、介護等体験学生が、体験をより前向きに教職活動等に活用しようとする意欲を高めるための指導の在り方を明らかにすることを目的とする。

## II 方法

### 1 対象

現在も本学の課外活動団体として活動を続けているボランティアサークル「紙ひこうき」の一員として、在学当時ボランティア活動に携わった学校教育学部卒業生で、現存する名簿に掲載され、調査用紙の郵送が可能なる者(昭和61年度～平成2年度卒業生、以下、ボランティア活動体験者)、計51名を対象とした。

### 2 手続き

#### (1) 質問紙の作成

安藤(1999)が、実際に介護等体験を行った本学現役学部学生を対象に作成した質問紙を参考にして、以下の項目を挙げ、質問紙を作成した。

表1 ボランティア活動体験内容(数字は延べ数)

話し相手	25
外出同行	19
移動介助	16
食事介助	9
トイレ介助	5
清掃・洗濯・衣類整頓	1
福祉イベント運営手伝い	23
その他	1

- ① 障害児教育への関心
- ② 障害者福祉への関心
- ③ 高齢者福祉への関心
- ④ 障害児教育経験の希望
- ⑤ ボランティア活動体験期間
- ⑥ ボランティア活動体験頻度
- ⑦ ボランティア活動体験内容
- ⑧ ボランティア活動で印象に残った出来事
- ⑨ ボランティア活動で戸惑ったこと
- ⑩ 現在の生活におけるボランティア体験の活用
- ⑪ 教職活動等におけるボランティア体験の活用
- ⑫ 介護等体験義務づけに対する意識
- ⑬ 介護等体験に対する期待

以上の項目の他に、対象者の特性に関する項目として以下の5点を挙げ、記入欄を設けた。

- ① 性別
- ② 年齢
- ③ 現職
- ④ 教職経験年数
- ⑤ 特殊教育経験年数

#### (2) 調査の実施

対象者個々に調査用紙を郵送し、回答を求めた。

#### (3) 調査期間

2000年10月中旬から11月中旬

## III 結果と考察

### 1 回収率

51名中29名から回答が寄せられた。回収率は56.9%であった。

### 2 回答者の特性

性別は男性6名(20.7%)、女性23名(79.3%)、年齢は平均34.8歳(SD 1.48)であった。また、現職は、教職に就いている者がトータルで21名(72.3%)であり、その他の職業4名(13.8%)、現在無職4名(13.8%)であった。男女比については偏りがあるが、これは、

当時本サークルに在籍していたメンバーの男女比とほぼ同じであった。

### 3 体験したボランティア活動の内容等

サークルの中で実際に体験したボランティア活動の内容を延べで示したものが表1である。今回制度化された介護等体験の活動例として、介護・介助の他、話し相手、散歩の付き添い等の交流体験、洗濯等当該施設職員に必要なとされる業務等が示されている(林, 2000)。今回調査を依頼したボランティア活動体験者も、これらに準ずる活動を複数体験していたことが明らかになった。

実際に活動した期間は平均2.85年(SD 0.97)で、期間中の活動頻度は、月1回程度(22.2%)及び年、数回程度(37.0%)と回答した者が多かった。年数回程度の体験であっても、平均3年弱の間関わっていたとすれば、実質介護等体験実施標準の7日間と同等かそれ以上の期間ボランティア活動を体験したと考えられる。

### 4 障害児教育等への関心

障害児教育等への関心の有無について、「大変ある」または「ある」とした者の割合を、7日間の介護等体験を終えた現役学生の結果(笠原, 2000)とともに表2に示した。障害児教育に対する関心、障害者福祉への関心ともに高い値を示した。高齢者福祉への関心の有無については、障害者に対する関心より低いものの、値そのものはかなり高かった。

介護等体験を終えた現役学生とサンプル数に違いがあるが、いずれもサークルでのボランティア活動体験者の方が若干高い値を示した。

### 5 障害児教育経験の希望

「将来障害児教育に携わりたいと思うか」という問いに対しては、17名(63.0%)が「思う」と回答しており、現在特殊教育に携わっている者が26名中2名いた。障害児教育従事の希望は、現役学生の25.5%(笠原, 2000)を大きく上回った。

### 6 ボランティア活動中の印象に残った出来事

ボランティア活動を体験する中で印象に残ったことが「ある」とした者が24名(82.8%)に上った。その内容についてカテゴリー化したものが表3である。

「障害児・者との交流体験」では、「養護学校の子どもたちとハイキングに行った」「成人施設の人といろんな話ができ」「初対面の人も心が通じ合ったと思える時間を過ごすことができた」というような、交流したことそれ自体が印象に残っているという回答が多く、「介助をして喜んでもらえた」といった、相手の応

表2 障害児教育等への関心(数字は%)

	ボランティア体験者	現役学生
障害児教育への関心	93.1	77.7
障害者福祉への関心	89.7	74.5
高齢者福祉への関心	86.2	79.9

表3 印象に残った出来事(数字は延べ数)

障害児・者との交流体験	8
障害児・者から受けた影響	6
障害児・者を支える人との出会い	3
障害児・者との交流における失敗・思惑違い	5
その他	4

答に対する喜びを印象的にとらえている者もいた。

「障害児・者から受けた影響」では、「障害者も、健常者と少しも変わらないと親近感を持つことができた」「食事介助では最初、自分自身食事がのどを通らなかつたが、慣れて平気になった」といったいわば自分自身の障害者に対する見方や接し方の変化をあげている者がおり、また、「身障者の詩集を読ませてもらったとき、感受性の豊かさに感動した」「障害を乗り越え、よりよく生きようと夢や希望を持ち、前向きにがんばっている強さに教えられた」「重心・筋ジス病棟の人から、生きることの姿勢のあり方に心打たれた」など、障害者自身の生き様に対して感銘を受けたことが印象に残っているとした者もいた。

「障害児・者を支える人との出会い」では、「病棟に入院している人を見守っている保母さんの温かい心を知った」「ボランティア仲間が、施設にボランティアをやりに行くのではなく、友だちに会いに行くと言ったことに驚いた」などの内容があげられており、障害児・者を支える人の障害児・者に対する対応や意識も印象に残っていることが明らかになった。

「障害児・者との交流における失敗・思惑違い」では、「相手がトイレに行きたがっていたのに気づくことができなかった」といった失敗や「初めての介助でいきなり抱きつかれて驚いた」「皆さん明るいですねと話しかけたところ、心の中は違うと言われた」などの内容があげられており、マイナスの交流体験が印象に残っているとした者も見受けられた。

### 7 ボランティア活動で戸惑ったこと

ボランティア活動中に戸惑ったり困ったりしたことが「ある」とした者が26名(82.8%)に及んだ。その

表4 戸惑ったことの内容(数字は延べ数)

障害児・者との接し方	10
言葉によるコミュニケーション	4
介助の仕方・程度	5
障害児・者に対する意識	4
障害児・者からの関わり	3
その他	2

表5 生活面で役立っている点(数字は延べ数)

障害児・者に対する意識	6
障害児・者への対応	5
他者理解	4
障害児教育への従事	2
その他	5

内訳は表4のとおりであった。

「障害児・者との接し方」では、「知的障害者の行動が理解できず、どのように接すればよいか分からなかった」「最初の頃はただぼっと立っていることしかできなかった」「ボランティアをすることによって力が入り、される側の気持ちを忘れがちになった」といった内容が複数あげられていた。関連して「言葉によるコミュニケーション」では、「一生懸命話してくれても聞き取れず、返事ができなかった」「知的障害の方の会話が理解できず、意思疎通が図れなかった」といった内容があげられていた。

「介助の仕方・程度」では、「車いすの介助の仕方が分からなかった」「障害の程度が分からないので対応が十分できないことが多かった」「どこまで手伝いするのがベストなのか見極めが難しかった」などの内容があげられていた。

「障害児・者に対する意識」では、「初めて施設訪問したとき、一緒に食事ができなかった」「自分の恐怖心が相手に伝わっているようで心配だった」といった内容があげられていた。

これらの内容は、介護等体験を終えた現役学生が戸惑いの内容としてあげたもの(笠原, 2000)と共通している。ボランティア活動体験者の場合、自らの意志でサークルに入りボランティア活動に携わった点で、義務化された介護等体験を行う現役学生と差異があるが、事前に障害児・者との接し方や介助の方法について知る機会がない中で、現役学生と同様の戸惑いを感じながら活動を行っていたことが明らかになった。

なお、これらの他に、「障害児・者からの関わり」として、「相手方に恋愛感情もたれてしまった」「自身はボランティアと思っていたが、相手は親友と思ってしまい、家に泊まり込まれたことがあった」といった、継続的に接することが原因と考えられる戸惑いも複数あげられていた。

#### 8 現在の生活におけるボランティア体験の活用

ボランティア活動の体験が現在の自分自身の生活に役立っているかという問いに対し、23名(79.3%)が「役

立っている」と回答しており、当時少なからず戸惑いを感じながら活動していたにもかかわらず、現在の自分自身の生活に活動が役立っている、すなわち生かされていると考えている者が多いことが明らかになった。どのような点で役に立っていると考えているのか、自由記述の内容をカテゴライズしたものを表5に示した。

「障害児・者に対する意識」では、「障害があろうとなかろうと、同じ人間なんだという感覚をもつことができた」「障害児・者に対する心の壁のようなものが取り除かれた」「パラリンピックなども差別的に見なくなった」などの内容があげられていた。また、「障害児・者への対応」では、「知的障害者に街中で話しかけられたときでも抵抗なく接することができる」「街中や仕事上で出会う障害児・者に声をかけたり手をさしのべたりできるように思う」「自然に高齢者や障害者に接することができるようになった」といった内容があげられていた。三澤(2000)は、障害者への接触経験が豊かな健常者は、一般的に障害者に対して好意的であることを指摘している。戸惑いを感じながらも直接ふれ合う活動を続けていく中で、障害児・者に対する意識が前向きな方向に変容し、それが行動面にも現れているとみることができる。

「他者理解」では、「ハンディの有無に関わらず、人はそれぞれその人でなければいけないことがあると思える」「お互いに助け合えるところは助け合い、自分のできることは自分でやるというスタンスで自分の子どもに対しても優しく接することができる」といった内容があげられていた。心身の能力の一部に損傷や遅滞があると、あたかもその人全体が価値を損傷された人間であるといった見方をするところがあるが、実際に障害児・者との交流を続けることで、そのような見方は是正され、人間的な側面が評価されるようになる(三澤, 2000)。障害児・者との交流がきっかけで、障害児・者はもちろん、誰に対しても価値ある人間としてみるようになった様子がうかがえる。

なお、「障害児教育への従事」では、「今の仕事(特

表6 教職活動で役立っている点(数字は延べ数)

学習活動における例示	8
子どもたちへの対応	5
物事を見るとき視座	2
特殊学級との交流	3
その他	9

特殊教育)は紙ひこうきでのボランティアなしでは始まらなかった」といった内容もあげられており、ボランティア活動をきっかけに、実際に障害児教育の職に就いた者もいることが明らかになった。

#### 9 教職活動等におけるボランティア体験の活用

現役教員を含め、これまで教職経験のある者26名に、ボランティア活動の体験が教職活動に役立っている(役立った)か尋ねたところ、「役立っている(役立った)」と回答した者が23名(88.5%)に上った。どのような点で役に立っていると思っているのか、その内容をカテゴリー化したものを表6に示した。

「学習活動における例示」では、「総合的な学習の『福祉』として、体験を子どもたちに話すことができる」「人権学習をするときに、子どもたちに体験談を話すことができる」「道徳や学級活動の時間の中で体験したことを話すことができる」「学習や行事の計画を立てるときに高齢者や障害者とのふれあいを取り入れることを意識している」などの内容があげられていた。介護等体験を終えた現役学生への調査(笠原, 2000)では、多くの者が「将来担任した子どもに福祉等について話すことができる」としており、そのことが現実に行われていることが裏付けられる形となった。

「子どもたちへの対応」では、「クラスの中で差別や区別がないよう心がけるようになっていく」「少人数学級を担任したときに、一人一人を伸ばしていく視点に立てた」「どの子にも良くなりたいたか良さがある」といったように、子どもを見る目が違うように思う」「さまざまな個性をありのまま受け入れようという気持ちをもっている」「不登校児と向き合ったときも、その存在を尊いものと感じることができた」といった内容があげられていた。これらは、ボランティア活動体験者である教師自身が「誰に対しても価値ある人間としてみるようになった」ことが影響していると考えられる。「物事を見るとき視座」、すなわち、「偏見や第一印象で物事を見ることがなくなった」「多面的に物事を見るようになった」といった内容も、子どもたちの対応と関連しているものと考えられる。

「特殊学級等との交流」では、「何のこだわりもなく障害児学級と関わることができる」「養護学校の子どもたちとの交流のとき体験が生かせる」などの内容があげられていた。今回の学習指導要領の改訂において、小・中学校の学習指導要領に障害のある幼児児童生徒との交流の機会を設けることが新たに示され、その一層の推進が期待されている(山本, 1999)。しかし、通常の学級を担当する教員の特殊教育(特殊学級)に対する理解不足のため、交流が円滑に進まない(笠原, 1998)という現実がある。そのような中、交流を前向きに受け止めている、ボランティア活動を体験した教員の存在は大きいものとなることが予想される。

「その他」では、「障害児教育の指定を受けたときは、とまどうことなく取り組み、成果を上げることができた」などの内容があげられていた。

#### 10 介護等体験義務づけに対する意識

小学校及び中学校の教諭の普通免許状を取得しようとする者に介護等体験が義務づけられたことを知っていたかという問に対して、「知っていた」と回答した者は10名(34.5%)であり、まだ一般には介護等体験の制度が周知されていないことが明らかになった。

#### 11 介護等体験に対する期待

今回義務づけられた介護等体験が、将来の教職生活に役立つかという問に対しては、24名(82.8%)が「役立つと思う」と回答した。ただし、「内容による」「7日間では短すぎる」といった意見も付されていた。また、特殊教育諸学校に勤務し、実際に介護等体験学生を受け入れている立場の者からは「何のためにこの体験を行うのかもっと詰めていくことが必要」との意見が出されており、特殊学級に勤務する者からも「どう体験したかの質が問われる」との意見が付されていた。

実際に介護等体験を終えた現役学生からも、「介護等体験を行う意義を具体的に教えてほしい」との意見が出されており(笠原, 2000)、この点について検討の余地が残されていることは明らかである。

## IV 総合考察

本研究では、ボランティア活動体験者の、障害児教育等に対する関心、活動の自分自身の生活及び教職活動への活用について把握し、介護等体験学生が、体験をより前向きに教職活動等に活用しようとする意欲を高めるための指導の在り方を明らかにすることを目的とした。

その結果、ボランティア活動体験者は、介護等体験を終えた現役学生と比較して、障害児教育や福祉、高

年齢福祉に対する関心がやや高く、障害児教育経験の希望については、非常に高いことが明らかになった。

一方で、ボランティア活動を行っているときに、障害児・者との接し方や介護・介助の仕方、程度等に関して戸惑いを感じていたことも明らかになり、介護等体験学生と共通の悩みを抱えていたこと、それでも、教職への活用に関しては88.5%の者が「活用している(した)」と考えていることが明らかになった。

ボランティア活動体験者、介護等体験学生ともに、活動に対して共通の戸惑いや悩みを感じながらも、障害児教育、福祉等への関心を高めていることは確かである。しかし、介護等体験を終えた現役学生の中で、実際に障害児教育等に携わる希望を持つところまで意識が高まっている者の割合は低い。また、活動が将来の教職活動に役立つとしている者の割合は低くはないものの、明らかに活動そのものに嫌悪感を持ち、教職活動にも役立たないと言い切る者がいることも事実である。

将来、介護等体験を通してより多くの者に障害児教育経験の希望を持たせ、体験の内容を教職活動に生かす意欲を持たせるようにするには、次にあげるような、より具体的で継続的な事前・事後指導を大学カリキュラムに組み込むなどして実施する必要があると考えられる。

- ① 障害児教育専攻の臨床実習等の様子を映像で見たり、あるいは一定の時間を確保して実際に見学したりする機会を設ける。
- ② 実際に障害者や高齢者と対面し、接し方や介助の方法についての指導を行う。
- ③ 実際に学生同士で、移動、食事等の介護・介助活動の模擬体験を行う。
- ④ 小・中学校における、交流教育や障害児(あるいは特別な教育的ニーズを必要とする児童生徒)の在籍の現状等についての講義を行う。
- ⑤ 体験終了後、体験中に戸惑ったことや課題と感じたこと、あるいは学んだことを意見交換する機会を設ける。

21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2000)は、障害のある児童生徒の就学のあり方について、通常の教育において対応することも含めて見直す必要があることを提言している。また、加藤(2000)は、小・中学校における軽度の障害のある子どもたちへの教育対応は、全校の理解と協力の下に行われる必要があると小・中学校新学習指導要領に述べられていることを報告している。そして、小・中学校

では相変わらずいじめ等の問題がクローズアップされ、対応策が種々報告されている(例えば石山, 2001)。このような中、人の心の痛みを理解できる人づくり、人間一人一人の能力や個性を認められる心をもった人づくりをめざす介護等体験の役割はますます大きいものになると考えられる。

介護等体験学生の、障害児教育等に対する意識を高め、戸惑いを最小限にとどめた中で体験できるようにするために、一定の時間をかけて、事前・事後指導に該当する授業を大学カリキュラムに組み込み、実施することは重要課題であると考えられる。

## 文 献

- 安藤隆男(1999)特殊教育諸学校での介護等体験が学生の障害者理解に及ぼす影響. 平成10年度教育改善推進費研究成果報告書「介護等体験を実施した上での大学における指導の改善に関する基礎的研究」, 17-28.
- 林友三(2000)盲・聾・養護学校における介護等体験一制度の意義等を中心の一. 季刊特殊教育, 97, 4-7.
- 石山勝巳(2001)私の「いじめ」対策とその実践例. 教育と医学, 49(1), 74-81.
- 笠原芳隆(1998)特殊学級担任が抱える学級経営上の諸問題一学校経営との関わりから一. 上越教育大学研究紀要, 17(2), 687-697.
- 笠原芳隆・大野由三・安藤隆男・河合康(1999)特殊教育諸学校における介護等体験学生受け入れ態勢と実施上の課題. 上越教育大学研究紀要, 18(2), 459-469.
- 笠原芳隆(2000)社会福祉施設における介護等体験後の学生の意識と実施上の課題. 日本学校教育学会第15回研究大会発表要旨集, 78-79.
- 笠原芳隆・大野由三(2000)社会福祉施設における介護等体験学生の状況と実施上の課題. 上越教育大学研究 紀要, 19(2), 675-685.
- 加藤秋美(2000)特殊教育からの発信. 季刊特殊教育, 98, 8-11.
- 三澤義一(2000)障害者の心の世界と社会心理. 障害者福祉論, 建帛社, pp97-120.
- 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2000)21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～(中間報告).
- 小川育男(2000)「介護等体験」の問題点を探る一盛

岡大学生の場合一. 日本学校教育学会第15回研究  
大会発表要旨集, 76-77.

山本昌邦(1999) 交流教育の課題と展望一小・中学  
校との交流を中心に一. 季刊特殊教育, 96, 42-45.

本研究は, 日本学術振興会科学研究費奨励研究(A)  
(代表者: 笠原芳隆, 課題番号: 11710140) の援助を  
受けた。